



特別  
A12  
5127  
14

善榮下  
柏木

若菜下

春乃若菜詞はりて号次朱権院  
五十賀の如き言ふ若菜とてまじり  
所をぬまう之さう一月をきり上ま  
か海氏為の十一氣の二月までの  
事ありい巻ハの上巻よほむを  
てりもり但の十二氣より四十六ま  
て乃り若菜徳よ所見り一この  
中でのいと氣ふりたる時にて年月  
をりさありやあるいと氣のよこ  
へし又年よりり年七氣の十二

月まで此りみこもり

中よりとらやしとよ 柳木のまわりと

巻のちゆ屋の文のゆはちけてしり

ほこもり 二月の晦日たり

殿上のせりらゆささきとあやしと

ふて二月とらこまのゆは月なれと

あしの賭ら二月の倒とあま

右友童のちゆは月とらて停

ひとしとらり

右右大将 右ハ殿黒右ハク方とゆは

まひとらむゆのりよとらり

とげら 右右ハ中右將のまひり

まらりへらこまらよ 前ら後ら

の座はちちとらり

福 右右の今年とらゆとらりといふあり

きり 右のまらゆはちとらり

とらとらりゆはちとらり

柳乃葉とら 柳の葉

と百歩ちて 村らゆとら 史記とら

とゆり 右右のゆとら

まらとらゆとら ちらゆとらとら

あしゆとらとらとらゆとらとら

とまりよきぬいりりつとて  
ぬいもいりりりや遠道は世に仕  
まじしやてまき 射有似君子其勇正

則必牛 中庸

しんまびく 家法中此物とんまき  
おのりやりり中此とぬるはりて

女律の法方り かしんまのりりて

ゆりりいあ 女之乃まは法りて

おひ今と一り

まきよいり 春富ハ女之のま

法先方り

らぬやりり かりととにりて

しんまびく

相益の法方り ありの女律へ

又このまきし かしんまのりりて

ぬいもいりりて法方りて

しまり折あり

しんまびくこのりり人あ 花 射有似君子

しんまびく

ぬいもいりりて法方りて 射有似君子

ぬいもいりりて法方りて

ぬいもいりりて法方りて 射有似君子



海よりうとみまうひてはせぬ  
ひしやうぶらうのりやぬし

大言 或る言

海より しのりの交りありうと

しんじの例のあやあり

ちよひの女子あまのゆきあひて 全書

せぬいらの母着るしらきとね

しんじのしんじのあや

まらせぬまのうらやう

重兵衛のしんじのまのしんじ

しんじのしんじ

しんじのあやいふあやいふあや

海氏のあやいふあやいふあや

あやいふあやいふあやいふあや

しんじのあやいふあやいふあや

しんじのあやいふあや

しんじのあやいふあやいふあや 本のあや

あやいふあやいふあやいふあや

あやいふあやいふあやいふあや

あやいふあやいふあや

あやいふあやいふあやいふあや 狂歌の方

あやいふあやいふあやいふあや

むげくらのふりじくれのみな  
りさるんふあてりひうり  
ぬましくくしてなむりし  
きしむらむらむらむら  
いしむらむらむらむら  
むらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむら

きせはあつとらり  
らあつとらり  
らあつとらり  
らあつとらり  
らあつとらり  
らあつとらり  
らあつとらり  
らあつとらり

八十八年よほむあり十八年の七位  
あはれむらむらむらむら  
八十八年よほむあり十八年の七位  
あはれむらむらむらむら  
八十八年よほむあり十八年の七位  
あはれむらむらむらむら



小まらふの片とらむしつゝの息  
ありしおまらふりりし

ふやとておまらふし 今屋とて

八位はふりぬらんとのりて侍仕位

の中ハ白ゆあるぬ侍よりおまらふ人

と源氏の表するの侍事

此の身とておまらふて ち政大臣被

仕の例は侍位とて其のち臣致仕よ

まびとておまらふ

かくうりておまらふ せ仕とやめ侍位す

けく冠とておまらふしあり

右大臣侍大臣ありおまらふ 源氏

右大臣少く同白ありおまらふ

女侍あり 今られ侍母兼侍殿

源氏連の妹たりとせぬありとぬら

ゆりありある侍位とて贈右のり

六条乃女侍 あしの子侍あり

右大臣侍大臣御あり侍位下 久務

大臣とて侍位あり

例の侍とてありおまらふ 久務あり

中将とてありしと右大臣侍仕とて

右大臣侍位とてあり

冷泉院 大炊御門のふちと二宮

きりぎり川のあしちまのむら

河原景代後院あり

ゆれすらしきし 朱雀院冷泉院

そとよ出先木のうらなりと

冷泉院へのまのむらしき

あふんやうと

あひるやまきしきりあて

まうらうしつらうまの世に

冷泉院冷泉世のむら

とまきりしと

乃出治世のむらと

うらうあよてはくと

とあり 湯成天皇は

業平中將より

和の治子と

みとらうらみあり

の一代より

ゆれんきよる

治氏のうら

ふを秋のうら

うらうと

よるはあり日なほあり  
まゝの女侍

まゝの女侍にまゝの女侍

りりあまのふりあまのふり

泉院のあまのふり

あまのふりあまのふり

は源氏のあまのふり

院のあまのふり

院のあまのふり

は源氏のあまのふり

源氏のあまのふり  
あまのふり

院のあまのふり  
あまのふり

今あまのふり  
あまのふり

年とあまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

あまのふり  
あまのふり

すありしり愛易せ死とはうまひり  
あり布袋和尙ハ法勤の變化主と拾  
得る文殊普賢といふこと一 凡そ  
いそひハころろな ありの入道

の勢いあててまてぬあり

ぬいりくせくし用しむせ新ひて

長保五年九月十九日浄堂園白十世凡  
大臣

随方官家泰石清水并住吉為東  
地神樂ちせく

大長ぬいり 上のまゝひりつ梅枝の  
れち居たりしちのしのかし浄昂位

り賢聖右大臣よりぬまきうり

ゆきの人うし

ゆひ人をあすのすげ 東極の舞人

各十人各信水が家信時系れ

出尉のよひとあり

ぬいりく ち方人しり十二人あり五位五位

五位各五人あり春日祭と出使の時

舞人信経あみな近所の官人あえ

信時系被樂調系と其信陣と

二とゆきありあよ信経ハぬいりく

あつてし信経ハ樂人のあ人あり

くはらりちるゆかり 一標 加路程より十人

あつ外ひくつれよりあり 兵衛尉りり

者今乃世とて 時付みあるもの時程

程の外よか 階程とて 徳家の徳去ま

やのーくつれいりありしーを

みま程のもは、可役さうと

中津樂入るふらとてあつ れ 出るる

いれとあの人あり

さうひといまんこつあり 馬うひる

中間うんといの者ありあつしあ

あつしああつあつとつししし

かううとあつあつあつあつして 信を

とあ

ゆ名のあつあつあつ あれ別あつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

別 のうあつ

あつあつあつあつ あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

としのふも秋成きぬふあり

りしらとあそびの山吹風のまよ

や秋成同じくあそびん家の山吹

様成すきくしんをまかりし

東極 東極譜云先一二等次強河舞

次水子次加古於呂之調子高麗及

調之是ハ神社乃秋幸るしんまの

あり神事し限らり

はくまはるしんて 山吹のしん今

ハ秋成今まよと云東極神樂ハ

る敷るしんまの 三敷樂

の指子と調ゆり今まよと云るく

まと感あり

山あ井よとれる竹のまよハ 聖歌

臨時系系人竹文青摺袍蒲陶深

下襦袢地摺袴合袴信往摺摺文青摺

袍柳色下襦袢白長袴合古口赤袴半

臂結引首赤各用付

かりの花乃まよハ 臨時系系挿以使

友系人挿信従山吹但信若信系ハ

使り系人信従ハ花上法右として

まよあり法社秋幸の時東極り使

とありたり

めしきまうのいらふ いらふ女のくわん  
しめよまうのきしりやうのくわんしめよの  
ふのきしり 長保五年位高信が社

長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社  
長保五年位高信が社

父まひろめハあ上人のト脱衣とい  
あり紐乃あこの袂一くおくそん衣  
乃多しそりおし一しるひとと  
引りらそんハくおくり衣とい

拵ら萩<sup>元</sup> 萩跡うそんう<sup>元</sup>ハ人長の  
作はしりり人長ハ神馬トあり衣  
のそそ兼のそりよいらそんつ  
乞ハ上達するものともんりや二の  
り来一丈位物候よありそんあまら  
例よししりらん<sup>三</sup> 一保徳院  
りあひて二の車よ 入らよそん衣り

きやうのりやニの車ハありて  
君の車よりまのしと乗つて次の車  
とあるハありたりありいせん車と  
ありてのりやうとありてのりし  
車とありといはんや

とよ又ふはうりて 浮氏の君は我の

とむの事とせらるるもの多し

任のふといふありあり ありの君

の事やありありありありあり

品尼のふふありあり

しーとありありありあり 乞ハ尼

乃言ありありのふのふありあり

候とありありありありあり

とありき君君のふふありあり

任此のむし乗ふく 十月廿日乃月

の霜りしむおありありありあり

まありしむありありありあり

い君の事御作りありありあり

ありけよの事とありありあり

と出まへまあり

ありしむの君君の ありありあり

ありけけしむのたふありあり



ひらきり 神供をいそぐ いかは  
文芸のうらなり 但習う事とこのお  
改とありやうのわざを習しあれ  
るありこの物よりしてハたしむら  
ふと一用とて

まらぬらひあまのこゝろ いかは  
のりともひりとりありひまの  
まらぬらひあまのこゝろ 感あるこゝろ  
まらぬらひあまのこゝろ あり  
引きとりとり下のまらぬらひ  
のくせあり

中務の君 じふのよれおのあり

りしとて 神あてりしとて

りし事あり

神あてりし 神樂する人のあり

万歳く 千歳くやあせの殿

やあせくしやあせくし

神あてりし  
あせくし

ありとて 柳あせくし

あせくしのあせくし

あせくし一夜よ 情あせくし

あせくし

そはとれはけふ 杉原とくしはてきり  
あはしのやしてとりて せんくせ  
きまおあはしよりとりたるまのや  
いひはくくぬき 作者の神といひ  
りしとんさるしとんさるおちりて  
あしの入道くふめおらしまし  
ハましとくみくぬきとくやとらま  
て記者乃はてり

入道市門 朱雀院

春秋の事 別觀の事

孫 別觀といふ子の父母しきり

名は毎年書し秋といふ子の父母  
の書し秋の事はあり中よりま  
てしありし事あり

世院といふの 二条院の事

二条といふは 女之乃父の出りて

二条内親王といふ對二十戸位田

三十四町あり

内乃書かして 今の上女これ

（書かして）あり

右大臣の 書かして

うらむしの書かして 玉璽書

毛六楽院ハ流シ多クハ申すあり  
ひしきありし事とは流氏乃流  
公乃のあり

女流者 明和 流事

女流者 明和 流事

くつ見ぬきあり

じふふせらく とら せらく

ぬいぬと 女 のまはあり

女 流 院 事 年

二十たり 流 加 流 と 流 の

か 流 あり

七 流 院 事 年 三人の内七 先 流 人  
し 流 あり

女 流 の 流 あり

大曲 琴 小 大 曲 中 曲 小 曲 と あり

女 流 あり 樂書曰即 文 之

夏 易 寒 暑 涼 冬 之 感 動 風 雪 之

詔 琴 事 之 琴 書 曰 即 曠 音 之 樂 官 之

と 於 琴 能 易 寒 暑 白 風 也 為 吾 年 云

鼓 之 感 玄 鶴 云 下 舞

女 流 あり 由 八 流 あり 八 あり

なり 按 字 あり

歩子ニヨリ 母の女弟也

十一日ヨリ 十一月ノヤメ月ヨリ但

法中十一日ニ 神今食一膳の歩神ヨリ

ヨリヨリトシヤメ月十一日ニ十一日

ヨリヨリトシヨリ始メヌト下トシ

小名ニヨリトシ十一月跡書あやまれ

能リクシ

年ノメ 源氏四十七巻

ヨリヨリノ 第廿一巻巻色ノ契ノ

ニのきんの梅ヨリ 女名ノ引始

ヨリヨリノヨリヨリ

大至ヨリ 源氏一巻ノ末ノ後

八年ニ始メヨリ十ヨリ

川多ハ 二月ニ歩神ヨリ

寝殿 女名ヨリ歩神ヨリ

ヨリヨリ

ヨリヨリ 歩神ヨリ

ヨリヨリ 歩神ヨリ

ヨリヨリ

ヨリヨリ 歩神ヨリ

ヨリヨリ

ヨリヨリ 歩神ヨリ

山吹ひかりの心 唐結体うら

あけりうめさくらに

あけり乃法こゝろ まのきり

一馬よ表の心のまはら

ししぬら

さ揚しの

あけり も かつ

ししぬら

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

あけり

らるる歩はなゆかりさげま

経地

らるる歩はなゆかりさげま

筆もさしんちのりちりゆき

まのしのまの人まうとあはるゆき

くさくさあやや いしんちゆき

ゆきしゆゆきゆきゆきゆきゆき

しのゆきしありとさるゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

個ハきりなりしニ乃とありしは  
ありニ乃とて教の結しりなり花  
ちりし教ハニ乃とてさめ  
程つるあはせ 又さりりまひり  
ぬきしなり

殿井とてし ちりしなりし  
そりしなりし  
も乃とてし 赤丸のひまわり  
らとのし乃とてゆかり  
らりしなりし 夕暮り  
うらりしなりし

月ハりしなり ぬきし目此のあり  
え乃とてし 夕暮り乃とてし  
ちりぬきしなりし

歩しし杖ささりしなりし  
きりしなりし ちりぬきしなりし  
ありし下のしなりし 杖此の  
しなりしなりし ちりぬきしなりし  
中しりしなりし

はりしなりし ちりぬきしなりし  
りしなりし ちりぬきしなりし  
はりしなりし

ぬくくぬく ぬくの女卿懐胎の思  
うたむのそれもちひけりひけて

まふおのまゝとふゆけりふまや  
うらとけぬ御まゝのひと あり

まゝらにり臨いのふくハナ

見しゆりしや 野下の夕れり

院ハ多ひく 朱雀院の清り

すしつやと流るるし見しゆり

女之乃まは清らまゝのひたり

女清る けりふのこのひたり

あしまた月 二月十九日りりし

ふりおしや喜れせらる月夜

後氏の若れ清りと集りまは感

ふこのいそしあり下のいそしハ秋

の感と又とあり

せうらら月けしとひん 秋乃感れ

作あそせさるやうにりりせ程ま

のさつぬぬ新氣ハまされり

夕にり高座と感りままあり花

色あまあり

女之喜ぶあられあり 女感陽氣

春思男感陰氣秋思 せゆり



律とハつこのぬい 唐の六律呂と用

陽とささふすりなりや朝とふ呂律  
用より陰陽不二ありて陽乃中し陰  
あり陰の中し陽ちく裡お遠りれ  
る

此の二れこやせつる 人より由らば

三つとといふありとふのくしてせき  
じハも移ひえくさひあり

あやう人のらに ちる流ハおのも

えある可と流氏れのおあり

かみ井くくありと ちりの行くせん

琴乃より弦のぬまきあり下ととも

ししありえくさのひてしとと

ししらよのくらありあり

あしをくひりし ちるおれとあり

ちりれえありちるさくそくせん

うしとありあり

あしえぬありて あしちく同あり

めぬひし事おあり

たよりあり人 おほくもぬい

人よりとありとぬいすしとぬい

りひてありぬいし

天地よりいへ

樂書云琴動

て地感鬼神

まののたれまはらよとていへ

りりまのりねしとていへ

りや琴と乃徳のよとていへ

りりしとていへ

とていへ

い國よいよとていへ

波野門僧正始

後中朝とていへ

白とて琴と引とていへ

は信とていへ

とていへ

とていへ

阿の終合のまよとていへ

鬼神乃申とていへ

藤蕪香散楚江

頭湖竹叢邊涙不収莫把悲絲寫離

惡夜深簾外鬼神愁

中興詩

とていへ

琴大事りふとていへ

よりとていへ

世れとていへ

うあれとていへ

まんのまはらとていへ

衆悪とていへ

中琴今徳寂侵 之選

親子と云はれんハ世中ふえりの物。

道より逢ふるは里ありとてせり

つらき思ふもさうさうとてしり

とゆひあり

師やとて人にも下 与りあり

終まなり 琴乃曲は高山流水を

いふあり 鐘子期と云者琴今とて

師の云は山よ入て行をいして入

てまの事ゆひたりとてい師

とてと云らるのらさ山流氷とて

この曲くまぬてなりしあり

こころをさし あいの女席の法殿

のまゆらなり

くはゆり あいの女席此等とて

いれのとてゆりゆりゆりて

を流氏の君別あり

吹上りきらつて 入とてさる山

りたりあり

あいの女 甲んもらあり

ふりて ちり律なりとて

あいの女 女個 掻平 片巻

水戸 嵯峨海波 雁鳴調

備前守のほろろとあはれ

いふ若くは... 七八歳の人しきり

らの若く... せうのらふれ人なり

ふいふ... クレのの息なり

いふいふ... じふふのしきりなり

あふあふ... せいのあふなり

いふあふのしきり... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

いふあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

あふのあふ... せいのあふなり

十回りし

手紙のいふはまゝよ一乃おのこら  
ふん中つまよいきりてニハのこ  
つしりいぬひりし

歩形は 赤女舟のつしりし

石僧都 山崎の修部ののちり

りしハ 徳氏の徳し

いしのお 山崎の徳し

きよとらひあししうまらし

さうんせやひりしりし

世中しり

ふんまの 女乃まの歩形

まはかつし 山崎しり

うまらし 徳氏の徳し

かひくあしし 利徳氏の徳し

又はあやまりしのもち 葵のしり

あまらしうかくてまらしり

さうしりし中しり

しりし

あつちやうしりしりし

しりしりしりし

はしりしりしりし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし

中まのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 中まのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし

白鳥院とてまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

あまのまはくしきしにまゝとて凡そ  
 のふひもなほしきし  
 後の世とてしきし

よく申す じつらんのじつらん  
女布の造方なり あしの女布より造  
たつていふはしつらん例をいふよ  
しの造りありあり

此の造りあり 女布より造りあり  
ういそくしやく じつらん  
あつらんありあり

よりとみま じつらん じつらん  
て又あつらんあり

は院より 朱花院  
あつらん じつらんのりあり

宮代造方 女とのえ

あつらん じつらん じつらん  
あつらん じつらん

あつらん 今らん造り  
あつらん じつらん

あつらん じつらん じつらん  
福大取平大得福 老経は

あつらん じつらん じつらん  
あつらん じつらん

あつらん じつらん じつらん  
あつらん じつらん

めいほうひりりあり歩装うをくさ  
くくドせしんこ

二文 藤葉宮 母二葉 歩具前 ころまとは女

この文此事あり

ちくらめいんれんしよとてかく

我ちちくさめつおのさけしりわ

文の歩侍院 女この文れれ乳めん

院乃く 朱雀院

くはれれしん 女この文とゆな

しすらしをゆとりまけしりしあり

ろくくくく又別けりしあり

さくハ 世れあひよくあわあくりりこ

えりこくしけしん 女この文あり思

いひささきおるなり

さくちりあハハハハ 女この文と指

あし許るんやうありしやあり

歩らりりあハハハ 朱雀

院の歩らさくちりりあり

歩らの女とあく 女この文の中如言

よほど中納言さくち位のねるありこ

位の袍父遠きみあり

くらこちしえいひをくおりしとハハ



おとといはぬきまのゆづりししぬ  
りしゆし

今もよりしやうけしてのぬきまあり

物れむしぬ 徳氏ニ参院よりゆづりしあり

女席の香もあつてありて 二条の香

業平北通りし事をもゆづりしや

ほいまり ありたりたりしりし

りしゆしぬ ちりちりしゆし

ちりちりしぬや早下のしあり

やつしゆのひて ちりちりしゆし

のぬきまあり

参院 ちりちりし

女房十二人 ちりちりし

とけしゆしぬあぬ ちりちりし

ちりちり

あつしゆしぬ ちりちりし

ちりちりしぬあり

源中将 ちりちりし

ちりちりしぬありぬは ちりちり

あつしゆしぬありて双紙のしあり

ちりちりしぬし ちりちりし

院し 朱在院のありあり

きんぐねて 今副しぬもつちり  
ほこやのいふと 実事するあり

しやうあり

えもつちのうら ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら

いふのちのいふの ちよはとつちのうら

あつちのうら 業平ニ余れちよはとつち

ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら 夏中のうらなり

ちよはとつちのうら ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら 双紙のいと兼之院よ

ちよはとつちのうら

物乃ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら

ちよはとつちのうら

今更りつちのうら 命なり

あつちのうら 猫の夏あり

ちよはとつちのうら

あまのついでに...  
あまのついでに...  
あまのついでに...

秋乃花より也 若の子乃...華也

ゆきと新花より也 且ぬ 我今

もあまのついでに 神より...  
あまのついでに...

りくよりと...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

のり...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あり

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

あまのついでに...  
あまのついでに...

えよらしくしるしをいふことすし一か  
君はさういふしるしをいふしるしや

同さるしるしをいふしるしや

ありあけなるしるしをいふ

あつちのしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

女ま 落葉のしるし

ちるし ねまらえらるしるし

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

女ま ねまらえらるしるし

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

いふしるしをいふしるしをいふ

あつしつにせらるるにふらふらに  
えそののひかりもにうらむらむら  
をねらふにふらふらにうらむらむら  
とんたふらふらにふらふらに

まつりの日　　つりの日

く肩まつりく　　摘み通し

まつり神のゆらゆらにうらむらむら  
まつり事なまつりまつりあひまつり  
のゆらゆらにうらむらむら

まつりまつり　　まつりまつり

まつりまつり　　まつりまつり

いほひつき　　女に乃まふとす

のひかりにまつりまつり

まつりまつり　　まつりまつり

まつりまつりまつりまつりまつり  
まつりまつりまつりまつりまつり  
まつりまつりまつりまつりまつり

まつりまつり　　まつりまつり

まつりまつり　　まつりまつり

まつりまつりまつりまつりまつり

三報盡者能延六月任不託 義規 沙也

あつらひとちねくものこころを  
よきこころにむかひ

ふれしをばねくしとせむけり  
いざらくぬひて中しつらう  
者くさくしてやけまきとんたを

あつらひとちねくものこころを  
あつらひとちねくものこころを  
あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

あつらひとちねくものこころを

さへ徳成つる事なり 聖人よとせり

ちよも心からいふ事なりとせり

も一にて 別の影法師なりとせり

さへ心からいふ事なりとせり

さへ心からいふ事なり 聖人よとせり

聖人よとせり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

さへ心からいふ事なり

くしやへ 夕音洛

くしやりの花よりくしやのひえとされ  
ましく 禰 愛くくしやのくしやの

又云 宰美あり日中りぬらありけ

けんさうしてこれぬやりのことあり

て日中り出入るるものありや

女乃才ハ母のつこくさりのことあり

女人地獄使能断佛種子 涅槃經

いじりのことありや

五戒龍王經一日一夜間持之帰

ぬ戒人生三十三天中

ありくしやの事とくしやの事

女乃才れりくしやの事とくしやの事

しやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事

くしやの事とくしやの事



りらりらりらり

身入りしりらりらり

このまゝ又も通るりらり

くちやい海り 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

ふらふらりらり 懐妊りらり

六つらきししつぬりかのの  
 といふはかたはくはなり  
 夕露よ袖ぬきしや 日くし  
 くらゐににらにらにらにらに  
 ありしにりぬきしにぬきし  
 けしきり日書しにけしきり  
 鳴きやけしきりけしきり  
 初きしににににににににに  
 夕書しににににににににに  
 人とけしきりけしきりけし  
 是にににににににににに

是に風ぬきし 於靡乃のや  
 ちのり八音れ扇し  
 ちのれ乃すしゆの 現きり  
 万葉の音し乱しとあり  
 ニまじり 魏書ハに七も二つは  
 おかしくし又ちけしきり  
 海にけしきり  
 けしきりけしきり 海氏の沙  
 けしきりけしきりけしきり  
 けしきりけしきりけしきり

うらやま

人よ思ひよせぬのくれも みにか

はるのちのちのちのちのちのちのち

まのし事うりてハ思ひつゝをりせ

のうしあひのちのちのちのちのち

とありしやあり

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろ

くちまゝ *Ami Gami Gami*

ゆゑのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

の病氣れ事ありあまの乳女

のこゝろのこゝろのこゝろ

は中初まれよは似たり 女房の

ゆゑのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろ

ゆゑのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

のこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

ゆゑのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

あつちよふらふ 懐推るのぢり

とまじらうの家方り付てふぬり人

そあり 中序文夜ハあまのの中を

まじり日死よふらあましくかゝぬき

あつちしやう

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

院をききしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

あつちしやう かんくおりのぢり

秋意のひまれらんちやとるひは  
ちりじまり切なりとあり

ふとふとひはまふとてははく  
ゆひうしりいりりあり

とてぬえちちのたひ

いとちり居し 女との交れ許し

ちんつけ 双紙の詞と難ほくおん

とてとてと 源氏の清なり

の清事と懐妊のふし

まはりし居しとて 双葉の地と

あやせよ 源氏の清なり

い清なりしよ 女との交の清なり

源氏のあつり 女との交の清なり

おしくちの清なり

右乃中との清なり 女との交の清なり

この行し 女との交の清なり

じよんの 女との交の清なり

いよとあるなりなりあり いてま

まよとあり

二条の内侍 月夜あり

つらとるひの清なり 女との交の清なり

あまの世はとてまふとて 女との交の清なり

よはるむくようこころしあやや  
海氏の涉道かのちかみこしきしうたれ  
しこいあまのよは海邊よりせめて  
くあまのよはきうくくおりれ  
ちりをよるむくよかかおし  
くうくうく勝中よらうう  
へのりりれ

涉るくくのちらし  
あま舟しんハる 是くあま舟  
と海邊りやうりく道くのど

まありーくくあーの浦は  
りりせーくめくこのよはぬ  
きりいりハ道終くけう海邊  
はーし事なり

あーあまあの方とせう  
廻向ちちあまあく  
ありまーくく  
くれのりー

さーきりあつ  
かまーも 勝月来のよは  
のくよんをきりきりわら

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ 源氏

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ 勝月秋のうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ 勝月秋のうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひ 人は嫁するもの

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ 勝月秋のうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ 金銀の細工のうらなひ

乃具奇しき事

十月廿二日 朱彦院

の赤賀三好より

行ふ所也

かんの君也 福永朱彦院

まをりて

院も

あし

しる

り

赤中

赤中

朱彦院

まをり

まをり

赤中

まをり

まをり

まをり

まをり

まをり

まをり



あはれいさのせりし

りししはりく 保氏の流し

こり流し みるの流し

りしゆり 保氏の流し

今も後せりしよしん いぬ

せ流しつひあはれし

あ乃 朱羅院の流しなり

うししとん女とのまは流し

あよふ前しとせてやハ 保氏

の流しつひのしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

あはれしとん

屋うへ月比さしり終るぬとて ばえ乃

後よりやうて子しるまの由氏(すい

りあまゝぬるあり

丁次也ハさゝめて祓言しぬるしりし

まごのそぬりやありきん 丁次也ち

子しるま乃るたりあやうしりし

ハ猫乃つ支ひきうしりたるのそ

こめぬのしり体乃合終る

十百 街賀乃りち集院とて試

果あり

いさひ乃詩子ハ いさひ生終る六句

果乃まなり

とささし 次あり

は詩言ハ詩子の也ハ月終るま

花五里ハ調樂はみぬまよりて津

氏の中りくの月也ハはさ

らしかりくさし ちあらしとま

ふもあしりしり終るしりあし人の

あやまじりしりまなり

そりしりく ちめハあしりの

けしとて又別して詩使る

例の字らるる 由氏とてしるま

の言し中よりしりし

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

あはれしりしる居りたはり

うすまろひのりさゆのひつりし  
しあまろひのりさゆのひつりし  
らぬるやちかほはまろひつりし  
のりさゆのひつりし

物の部 道乃ちいりり八優りり

りりりりりりりりりりりり

むんうのりちかく 毛散里は方し

又こりりりりりりりりりりりり

らあまろひのりちかく まよは氏の出りし

あまろひのりちかくりりりりりりりり

しあまろひのりちかくりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

あまろひのりちかく 友乃ちあまろひのり

あまろひのりちかくりりりりりりりり

ゆりりりりりりりりりりりりりりりり

仙遊歌 大食調曲五弄

あまろひのりちかく ちりりりりりりりり

あまろひのりちかく中地りりりりりりりり

あまろひのりちかくりりりりりりりりりり

あまろひのりちかくりりりりりりりりりり

あまろひのりちかくりりりりりりりりりり

あまろひのりちかくりりりりりりりりりり

右乃引く 乙らも行く

吾らと父の縁を 母父の世より縁

まじり八帝との清じまよし

清じまよふ行成して じゆいの舞と

感一ぬまより

とろろ一しうじ 光初る片なりよ

ゆ休やなり

りしての片なり 何事と人よと

まきりまよいの人なり

願ふ清一とまらりゆき 一ふま あま

しと物も世父の言とまらりゆき

母父の 女こらま あま

ふしあて かしまらるるなり

無事あく二のまらりゆき

まらりゆきあくなり

も清息所 ひとまはるる母と

そ乃事ゆき 女まらるる

人しゆれよ 婿子れりる物もれゆき

本五日 十二月乃事なり

母父の清ふれらる 女とのまらる

清ふれ母父のりあくまらるる

例のぬ十寺 清賀の母徳寺の祝備

八平餘の敷と用れさるるもの二十  
乃此の美りしとて五十寺ありて此と  
經ありたり

おろしき此寺ありて 仁和寺ありて

皮寺は回堂本寺の金剛界大日なり  
摩訶毘盧遮那佛則大日なりなま  
つひるさる此寺誦經ありとてい巻此經  
體の相寺あり

此寺は乃此寺はありとてい巻此經  
體の相寺ありとてい巻此經  
相似ありとてい巻此經 見卷也

柏木

巻廿七名なる相と縁りて号とい  
 手紙ハ四月より夏入りしけりてまじい  
 小秋つらきし事なりといふ

年々之りぬ

源氏其名守年八歳なり

日もしあけぬ

まらむしひハ母にま

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

ぬりけりし事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

よき事なりし事なりし

はなをさしませし あらしくもぬるる

あつきのうきとみちのりしうはせう

くし た 時平云之男 敦忠中納言

つるふらふら 時業師 経とよむせ 竹のま

十三神のうららひくち將よりとて

て秋らひくらわれとききてま

死ぬひぬくと病人とらひはる

世継しる

ひのせとやるくちあつらふ

業平ニ雲のありき

あしりりし

じとひとめぬよ ま 六巻

りあふとむらりきくしあそ

のさしあふは執事とあつらひし

うらひら

今らよ き ちとまの語

かしのせれ あ のまのひめ

見しとと 指 とらふし

うららぬらんせあつら く む

同うしハいそむらふ

あつら

クハ あつら の語



うのちき ちよとけまてハ梅しき

あつれーあつれ

まつしきあいはら かしんまのうら

うのあつれ 庵のうら

人ひらあつれきりりーせ 人の

よはとらーうらあつれ

うやあつれら かんきりり

じらあつれら ころあつれら

しあつれら

又日乃来 秋ぬ中まらり

たま 中まらまらり

院乃 冷泉院乃殿上人りり

さあれ

さろとせハ 女之のまはあつれら

よの中らあつれら 海氏の徳

けりあつれら かつらあつれら

れつとあつれら きののあつれら

あつれらあつれら けりあつれら

あつれらあつれら けりあつれら

あつれらあつれら けりあつれら

あつれらあつれら けりあつれら

あつれらあつれら けりあつれら

はねはうのふりりうあれう一八ハ  
ううううううううう

あううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ううううううううううううう  
ううううううううううううう

ましくせやくしき 物本乃親らして  
きくぬらなり 丹一の紙巻を堪へ  
流るるありて 母のまの流  
あくしちまのち、あなり乃ま  
まのくあり  
なまのこる紙巻よ 流よじまの  
このまの流ぬらなり  
右大弁 子しちまの才なりう  
まの行なり  
ゆらゆら 控大袖まのありま  
流るよくまののりーあし

よしくさ 夕張りの子なり  
ふくまのこる病者乃ら  
なまの流るぬらなり  
まのくあり

まのく 夕張りの流  
ゆらゆら 子しちまの流  
ゆらゆら 控大袖まのあり  
ゆらゆら 夕張りの流  
ゆらゆら 子しちまの流  
まのく 何海の流る  
まのく 子しちまの流

かくうせむかひなり

うまればあまの 兄方の事なりゆき

しんかひのちいしはりのこと見か

あせりのこといふことあり

らぐきん 諸言なり

後あり 諸言なり

うしちりちりあまのこ

は井し引返しとあひく同し

うしちりちりあまのこ

一條の 庭のまのまの

院ありし 朱石院の法あり

ふうふ ちりちりあまのこ

女侍し 冷泉院の女侍なり

あまのこ 一版なり

女侍の法あり ちりちりあまのこ

おのちいしものちりちり ちりちりあまのこ

やじ美ありぬハ ちりちりあまのこ

あまのこ ちりちりあまのこ

ちりちりあまのこ

あまのこ ちりちりあまのこ

ちりちりあまのこ

あまのこ

例へば歩らぬやうに 母への愛は厚しな

りぬきまを原にあり

あつたおとこも 男の子にたは

つたにたはつた

らつたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

つたにたはつた

しうらふあえまじし かたあ  
あまふるやうら

まのこお 眼のうらひあまら

ちまてとは源氏の侍る心  
はうらりてし

まのこおあひてうけくひまら

五十八筋方を後神思堪喜亦堪

嗟持盃況然他語慎勿祖愚似

ゆえ耶

しうらうしうらうしうらう

てあふくしうらうしうらう源氏の

歩くしうらうの生ぬるうらう

のこやうらあ

八十八 樂天 八十八子

うらうはしうらう源氏を

八雲の侍事

りんらうあよ 樂天あうあよはら

うらうはしうらうはら八雲

源氏の侍うらうしうらう

うらうはしうらうしうらう

あまふるやうら

い申るうらうらう人 か

博識一人のまじり

秋沙より阿部のあはれん 女房と

秋沙の媒一より女房をよめたり

かまへくまむしとまてとあはれしと

おぼしとまむし

多世わらふ縁はまじりど ありとら

秋沙の少ね多世の万代しげく

多縁はまきとまむしとまむし

秋又ハ秋一連の女ハはれとあ

りしとまむしとまむしとまむし

と縁程とあはれし

秋しとら 多しとまむしとまむし

秋のこまし事ありやとくまむし

つとむし縁りのまむし

りしとらとまむしとら 一とまむし

よくまむしのまむしとらとらとら

はれとまむしとまむしとらとら

多むし又ハ女房のまむしとらとら

多むし 中一の縁とまむし

父のこむしとまむしとらとら

かまむしとらとら 多むしとらとら

多むしとらとら

移分をよめぬ

無傷の時ん物乃ま

あしりるすた

是の時分をよめぬ

はる月夜分りり

しん分付く見ゆ

さのしん分付く見ゆ

はる月夜分りり

しん分付く見ゆ

さのしん分付く見ゆ

あしりるすた

移分をよめぬ

あしりるすた

例の并れ若事相をよめぬ

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた

あしりるすた



神事あり

二月癸卯月あり年中

初より二月あり三月あり四月あり

五月あり六月あり七月あり八月あり

九月あり

十月あり十一月あり十二月あり

正月あり

二月あり

三月あり

四月あり

五月あり

六月あり

七月あり

八月あり

九月あり

十月あり

十一月あり十二月あり

正月あり

二月あり

三月あり

四月あり

五月あり

六月あり

七月あり

八月あり

九月あり

十月あり

十一月あり十二月あり

正月あり

二月あり

三月あり

此の通り行かぬ法がある  
はるかにあり

はるかにあり 親友の中の  
はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

はるかにあり

利二十八果あり

あししるりいりうまうねくつら  
しうああ

いぬくーぬすらりいぬく 久保の女

二のまはあひけぬくしていぬく  
あししるりいりうまうねくつら

あししるりいりうまうねくつら

あししるりいりうまうねくつら  
あまのれうりいりうまうねくつら  
いしうまうねくつら命あししるり  
あししるりいりうまうねくつら

げあししるりいりうまうねくつら ねくつら

あししるりいりうまうねくつら

いぬくつらのあししるりいりうまうねくつら

あししるりいりうまうねくつら  
あししるりいりうまうねくつら  
あししるりいりうまうねくつら

あししるりいりうまうねくつら

あししるりいりうまうねくつら

あししるりいりうまうねくつら  
あししるりいりうまうねくつら  
あししるりいりうまうねくつら

しつりふとくは福らあらし

君の御母君

夢はさくろふあり

いふことありし

夢事なりし

草木のうらみあり

さよふ 夕なつとくはひりくは後

あすはしとくはあなまあり

あまのつとく

夢想のうらみあり

うらみあり

ふれらぬつとくはあつて

あま

はすのちとくはあまの服と親の

あまのつとくはあま

りぬくやあまのつとく

夕のあま

あまのつとくはあまのつとく

あまのつとくはあま

あまのつとくはあま

あまのつとく

あまのつとくはあまのつとく

あまのつとく

あまのつとくはあまのつとく

あまのつとくはあまのつとく

あまのつとくはあまのつとく

一村あり

あまのつとくは一村あり

あまのつとくはあまのつとく

り体のせうらうめ、あまうらうらうら

らうらうのうら、まきんのらうら

らうらうらうら、あまうらうら

枝りうらうら、使程のうら

ス務めまよふはひはうらうら

らうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

今までのうらうら、うらうら

うらうらうらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら、うらうら

うらうらうらうら

右將軍の御書に  
うしとくしりしめりりあさむら

あらつひらり  
右將軍の御書

其世中  
右將軍の御書

こゝろよ  
右將軍の御書

のまのよはくめくその同好みく

あつむのこよ  
右將軍の御書

今もあつむのこよ

うしとくしりしめりりあさむら

ひらり

とハれむら  
右將軍の御書

うらよ  
右將軍の御書

ハ大書あり

うら行  
右將軍の御書

右將軍の御書

天賦善人吾不信右將軍墓

草初秋

うら庭乃らとくめくあつむら

あつむのこよ

顔秋といふよ

あつむのこよ

あつむのこよ

左將

言と好りし世紀在昌作より

元 在来の書より唐名より金吾將軍とい

ハ右將軍といふは相違りしなり

る是よりしるしは世たり

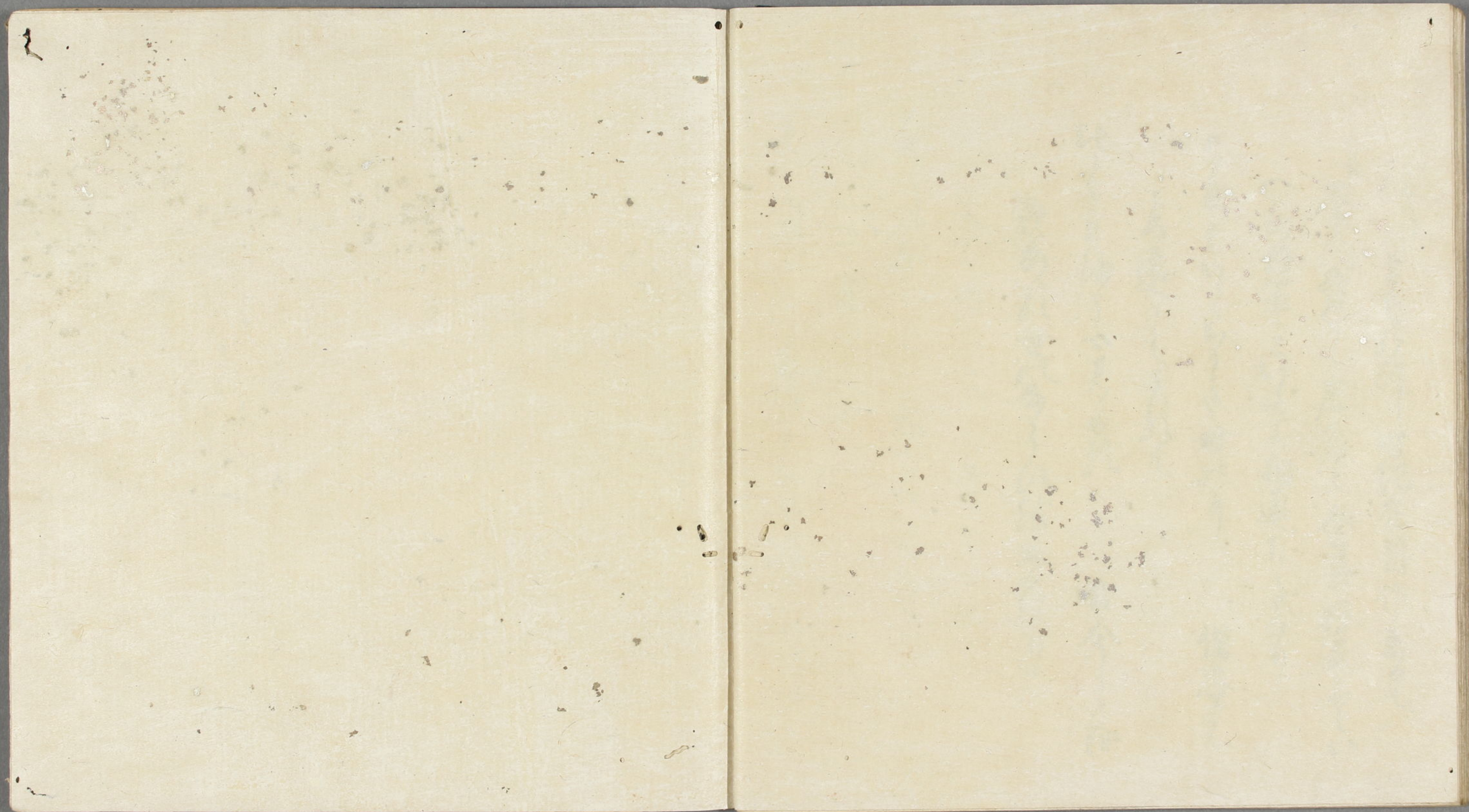
保忠かん

より遠くしるし

比よりしるしは見ぬ

古今の家

款あり世たりしは然るなり





以下全て  
白紙

